

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
主任部長兼検査科部長 兼甲状腺センター長	高野 徹
部長兼糖尿病センター長 兼リハビリテーションセンター副センター長	樫根 晋
医 長	大槻 朋子
医 長	倉敷 有紀子
副医長	伊藤 博崇
医 員	高山 瞳
医 員	酒井 保奈

—概要—

糖尿病・内分泌代謝内科では糖尿病および内分泌代謝疾患患者の外来および入院診療を行っている。外来部門において、糖尿病、甲状腺疾患、その他の内分泌疾患の外来診察および糖尿病合併症進行予防のための療養指導(糖尿病合併症外来、透析予防外来)を行っている。病棟部門においては内分泌代謝疾患および肺炎等の内科疾患の入院中の管理を行っている。また他科入院症例の血糖コントロールを共観として担当している。人員として昨年と変化はなかった。

—実績—

外来診療については、糖尿病、甲状腺、その他内分泌疾患の患者を主に診療し、1か月の平均外来症例は612人であった。

2019年より甲状腺穿刺細胞診を当科で実施、甲状腺腫瘍の患者の診断を本格的に開始し、手術が必要な症例については耳鼻咽喉科に紹介、その後の術後管理を当科において実施する体制となっている。入院総症例数は233症例であった。内訳は糖尿病136例(1型糖尿病12例、2型糖尿病120例、臍性糖尿病4例)であった。内分泌疾患は34例(下垂体機能低下症精査10例、甲状腺疾患3例、副甲状腺疾患1例、原発性アルドステロン症精査19例、副腎精査1例)であった。救命救急科入院後の転科症例として低血糖性昏睡7例、高血糖高浸透圧症候群3例、糖尿病ケトアシドーシス2例、甲状腺クリーゼ1例であった。睡眠時無呼吸症候群精査9例、一般内科症例31例(尿路感染症4例、肺炎21例、電解質異常6例)、その他の症例は10例であった。新型コロナウイルス感染症の全国的な拡大に伴う入院制限などもあったが、一般内科の入院患者が増加したことから、昨年に比べて、入院患者は46症例の増加を認めた。入院中の他科依頼による共観については405症例を担当した。

糖尿病患者の外来での療養指導としては糖尿病透析予

防指導を68件行った。またフットケア外来における患者指導は1年で240件の指導を行った。フットケア外来においてはフットケアだけでなく、入院を控えた患者、糖尿病療養が困難となった患者の療養相談も行った。

院外啓発活動として、例年世界糖尿病デー、りんくう健康フェスタを行い、多数の市民に参加いただいていたが、本年は新型コロナウイルス感染症の流行により、人が集まるイベントの開催は中止し、11月2日から13日の期間、2階外来待合にて『糖尿病と災害』というテーマにてポスター展示を行った。

—今年度の成果と反省点—

糖尿病、内分泌疾患以外にも一般内科の症例を多数受け入れた。コロナ禍で糖尿病教育入院が減少している状態で、入院患者の増加を認めた。今後も継続して、より多くの入院症例を診療していく必要がある。また糖尿病教育入院についても、引き続き、周辺クリニックへの働きかけなどを行っていく予定である。

—来年度への抱負—

糖尿病でありながら、通院していない患者が糖尿病患者の約4割を占めているといわれており、当地域においても、未治療患者を減らしていくことが、重要な課題であると考えられる。コロナ禍で困難なところもあるが、啓発活動などを通して、受診率の上昇を目指したい。また外来通院患者においても糖尿病のコントロールのみならず、合併症の評価をしっかりと行っていくこと、生じた合併症に対して速やかに対応できる体制づくりを行っていく予定である。